

## まえがき

神奈川県民にとって、また東京都をはじめ近隣の県の住民にとっても、丹沢は身近で貴重な自然である。神奈川県のもう一つの山塊である箱根が火山と温泉を抱えた明るい観光地であるのに対して、丹沢は鬱蒼とした森林と、その中を縫う数多くの沢や溪流からなる瑞々しく、しっとりとした自然を擁している。昔から真に山や自然を愛する人達や、大山詣でをする人達が訪れる地域であった。

その丹沢・大山の自然が、いつのまにか傷付きはじめていた。丹沢の自然についての最初の調査は1960年代に入ってから行われ、その成果は1964年に「丹沢大山学術調査報告書」として刊行された。この調査の動機は主として学術的な興味と関心からであったが、それを実行した結果、すでに丹沢の自然に変化が起こりつつあることが読み取れたのである。したがって、第2回目の調査は、そのような心配を念頭において行われ、1997年に出された「丹沢大山自然環境総合調査報告書」では、この地域の病んでいる姿が浮き彫りにされ、とくに丹沢の森林の貴重な構成要素であるブナ林の衰退が明らかにされた。しかし、ここでは人体にたとえるならば、病気の症状を診断したに止まり、具体的な治療の方針までも示すことはできなかった。

そこで、2004年から行われた第3回目の調査では、病んでいる丹沢を救うことをはっきりとした目標に据え、大学や県庁の専門の研究者だけではなく、登山者、山小屋の経営者、林業に携わる人達、自然に関心のあるNPO法人や一般県民までを含めて、さまざまな立場の大勢の人達の協力と献身的な努力のもとに行われたのである。その成果の一部は、「丹沢大山自然再生基本構想」として、2006年夏に刊行され、この地域の自然を救うための具体的な方針や、そこに生活と生業の拠点を置く人達の目標や生き甲斐に関する提案をも含めて、神奈川県知事に政策提言をするに至った。

しかし、この調査に携わった多くの人達の熱心な調査の結果のすべては、まだ公表されていなかった。ここには上記の提言をまとめる土台となった詳しい研究結果を示す。一つ一つの論文は自然科学および社会科学の分野におけるオリジナルな業績ともなるものであり、それらが今後他の研究者によって引用されることも考え、それぞれの著者を明確に示し、英文タイトルも付し、全体が学術報告書の形をとっている。調査に参加された方々がこの報告書により他の調査員の詳しい研究成果を知り、新しい視点からの分野横断的な対策を考えてくださるかもしれない。また、本調査に関与されなかった方々から、わたしどもが気がつかなかった丹沢を救う対策についての助言をいただけるかもしれない。そのようなことを期待し、人も自然もいきいきとした丹沢の再生を願って、本報告書を世に送り出すことにした。

平成19年7月

丹沢大山総合調査

実行委員会委員長 新堀 豊彦  
調査団長 青木 淳一

